

桃太郎じいさんの柴刈り

幼い頃に聞いた“桃太郎”のおとぎ話は、「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。まいにち、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」で始まります。おじいさんの毎日の仕事は、日々の生活に必要なエネルギーを手に入れることだったのです。背にして戻る柴は、調理、給湯、そして冬場は寒さをしのぐ程度の暖房に使われたでしょう。しかし毎日のように風呂に入り、部屋全体を暖めるには十分だったはずです。でも自然エネルギーですから地球の温暖化には影響せず、持続性が確かな再生可能エネルギーでした。

その後、1700年代のイギリスの産業革命を契機に、人類はエネルギーとして大量の石炭を使用するようになりました。そのおかげで工業が発達し、生活は桃太郎じいさんの時代よりはるかに豊かになりました。石炭に続いて石油や天然ガスも化石燃料に加わり、今では化石燃料なしには全く生活できなくなっています。では持続性はあるのでしょうか。化石燃料の確認埋蔵量は、石炭が約150年分、石油と天然ガスは約50年分ですから5世代分ぐらいです。そう考えると世界で年に110億トン（石油換算）、一人あたりにすると年に約1.5トンもの使用量は、あまりにも多いと思いませんか。確認埋蔵量も現在の消費量も、将来の見通しに不確実性がありますが、それでも持続性には不安を感じざるを得ません。桃太郎じいさんの時代には戻れませんが、それでも可能な限りエネルギー効率の高い社会システムと、エネルギー消費の少ないライフスタイルを追求する努力が必要と思います。